

英語教育における異文化理解の実践とその効果

—アメリカ・芸術・人種をキーワードに—

石井 凜佳
教科領域コース

1. はじめに

現在、英語教育の現場では多様化する社会に対応することができる生徒・児童の資質・能力の育成が求められている。『中学校学習指導要領解説外国語編』（2018）では、「誤解など生じないように、相手意識をもちながら適切な表現を選択し、自分の気持ちを適切な表現で伝えること」（文部科学省 74）、「文化に対する理解やコミュニケーションの相手となる「聞き手、読み手、話し手、書き手」に対して「配慮」しながら、「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけること」が示されている（文部科学省 15）。これらを達成するために、異文化理解教育と教科横断的授業の2点は、英語教育における軸となるべきものである。また、主観的な態度や価値観の相違を含む情意的領域を授業に取り入れることも欠かせない観点だ。よって今後、異文化理解をコミュニケーション教育に取り込むことが、現場では益々求められる。

2. 先行研究

異文化を理解することは多文化と自文化を客観的に意識し、物事をより自分ごととして捉える機会を多く設けることを目的としている。この意識を生徒に持たせるには、教師が社会的背景や知識を持つ必要がある。先行研究においては、多文化化が進行する中で、異文化理解においては「異」と「自」を意識する新たなカテゴリーの問い直しを必要とするものが多い。ここで強調すべき点は、日本の教育において異文化理解の認識が「外国の文化」そしてその「紹介」というイメージから変化がないことにある。異文化間教育のゴールは生まれや育ちが異なる人間同士が触れ合う中で意見の相違が生じた際、どのように意見をすり合わせるか。自分の感情を相手の立場に置き換えて感覚の差異（異文化）に気づき相互に努力することにある。以上を踏まえ、今回は筆者の造詣が深い芸術：クラシックバレエとその保守的な伝統の中での人種差別、またアメリカの歴史の中での人種差別を題材にし、異文化理解について生徒が考えを深めることができる英語教材を開発した。これらを中学校外国語教科書 *New Horizon* と関連付けながら学習効果を検証していく。

3. 調査方法

3.1 研究課題

本研究では以下の2点を研究課題とした。

(1) 異文化間コミュニケーション的要素を取り入れた教科横断的な学びは、生徒の既成概念を問い直すきっかけを生じさせるか。

(2)バレエを題材とした英語教材を通して、中学生の多文化共生に関する認知や態度、価値観はどのように変容するのか。

3.2 研究対象と実施期間

本研究では、茨城県 X 中等教育学校第 1 学年 A 組 37 名（男子 19 名、女子 18 名）、B 組 34 名（男子 16 名、女子 18 名）、C 組 32 名（男子 15 名、女子 17 名）のべ 103 名を対象として全 4 回の授業実践を行った。調査期間は、2025 年 6 月 9 日～18 日（休日は除く）である。毎授業後に Forms でアンケート調査を行い、異文化理解や多文化共生意識についての気づきや考え方の変容を調査した。

3.3 調査方法

まず、対象校で使用されている教科書 *New Horizon3* から異文化理解や多様性をテーマにした単元を確認し、Unit5 “What makes a good leader?” が相当することを明らかにした。次に本実践終了後も生徒が継続的に知識を使い、多文化共生に対する価値観や考え方の変容を促すことを目的として、筆者の研究分野であるバレエと人種問題に関連させた教材開発を行った。

バレエの内容については、第 2 回で以下 3 点を扱った。(1)バレエの歴史：イタリア発祥のバレエはヨーロッパで最盛し、その後ロシアで独自の発展を遂げた中で貴族中心・白人主義で構成される閉鎖的な環境が形成された背景。(2)アフリカ系アメリカ人ダンサーが受けた差別：保守的で伝統的なバレエ界は、有色人種に対して門戸を閉ざしていたが変化が起きる。その契機となった 1950 年代半ばから 1960 年代にかけてアメリカで起きた公民権運動、2013 年から始まった Black Lives Matter 運動の歴史。(3)多様な色のトウシューズの販売：世界で初めてアフリカ系アメリカ人で構成されたバレエ団 Dance Theatre of Harlem の設立により、肌の色に合ったトウシューズが一般化するきっかけとなった点だ。次に、異文化理解と教科横断的授業を関連させた全 4 回の授業の流れを示す。

第 1 回 “What makes you YOU?”：異文化理解授業の導入と、自分と他者が大事にしていることや、そのちがいに気づく。第 2 回 “Ballet and Diversity”：バレエの歴史とアフリカ系アメリカ人ダンサーに対する差別問題から、「通例」とは何か考える。第 3 回 “Dream Big, Speak Out”：実際にアメリカで行われていたアフリカ系への差別と、非暴力で闘ったキング牧師のスピーチを通して、自分が多文化や共生にいかに関わることができるかを考える。第 4 回 “From History to Today”：異文化理解の態度を改めて学び、まとめる。この授業において特筆すべき 3 点を述べる。(1)「自分」から「社会、世界」への関心の拡張：回次ごとに扱う観点を身の回りから拡大することで多文化共生について思考する態度を育成する。(2)「ふつうのこと（通例）」や「当然と思われていたこと」を疑い、再定義する：バレエの歴史やアフリカ系への差別を通し、改めて気づきを促す。(3)教科書との接続：*New Horizon3* の内容と関連性を示し、教育課程における系統性や、生徒が実際にその単元を通して、再度思考を深めるきっかけを与える。アンケート回答結果の記述内容を、2 つの領域に分類して定量分析と定性分析を測った。

[情意的領域]：共感や価値観の揺らぎ、考えの変化、そして自分の今までとこれからの振り返りたり見つけ直したりする態度、主観的な視点

[認知的領域]：歴史的背景や差別などの社会問題における知識理解、客観的な視点

4. 結果

特に第2回のアンケートでは、アフリカ系ダンサーへの差別と、伝統的で保守的なバレエ界での変容について紹介した上で、「肌色」から想像する色を自由記述形式で生徒に回答させた。その結果をもとに、回答を3つのグループに分類し、(1)固定概念：「白い色」や「日本人の肌の色」などを示唆する回答、(2)多様性の気づき：「多様な色」「一色ではない」という回答、(3)その他：具体的な色を示した回答結果をまとめた。

表1 「肌色」から想像する色に対する回答結果

今回、多様な肌の色に合わせて、トウシューズとタイツの色の種類が多くなった話をしました。 <u>あなたが、「色えんぴつやクレヨン肌の色」と聞いたときに、どのような色を想像しますか。</u>	
グループ	割合 (回答数)
固定概念	69% (66)
多様性の気づき	18% (17)
その他	13% (12)

この結果から18%の生徒には、バレエの芸術的、社会的変容を通して「通例」に対する意識の変化が見られた。次に、全授業後に見られた生徒の多文化共生に対する意識の変容の結果である。

表2 多文化共生に対する変容の回答結果

これまでの4回の授業を通して、前とちがう考えを持ったことや、新しく気づいたことはありますか。	
選択肢	割合 (回答数)
はい	85% (88)
いいえ	15% (15)

表3 具体的な変容について自由記述の回答結果

「はい」と回答した方 どのような考えや気づきがあったか教えてください。	
グループ	割合 (回答数)
情意的領域	57% (50)
認知的領域	42% (37)
その他	1% (1)

全体の85%もの生徒が、この4回の授業を通して以前とは異なる態度や価値観の変容があったと回答したことが判明した。そして、回答の自由記述を情意的領域、認知的領域に分類した。以前とは異なる態度や価値観の変容があったと感じた生徒の中で、57%の生徒が情意的領域に関して、自分の内面の変容について記述を行っていた。その他にも、これからの社会を生きていく上で、どう行動していきたいかという意欲も読み取ることができた。

5. 考察

5.1 研究課題1に対する考察

本実践を踏まえ、異文化理解を取り入れた学びは、生徒の既成概念からの変容を促すきっかけを生じさせることが明らかとなった。第4回のアンケート結果では、57%もの生徒から情意的領域に

関連した回答が見られた。また、自分の内面の変容に対して6人、社会に向けて行動する意欲を記述した生徒が44人いた。このことから、本実践は知識の習得（認知的領域）の分野だけにはとどまらず、多文化共生に対して持つべき態度を見出す内面意識の変容（情意的領域）を促した。

5.2 研究課題2に対する考察

本実践を通して、生徒は「通例」が、異なる側面から見るとそうではないという感覚の差異を感じ、これまでを振り返り態度を改めていく意識の変容が見られた。例えば、第2回の授業後のアンケート調査では、生徒自身のバレエに対するステレオタイプに基づきながら、トウシューズの色が固定されていたものから多様な色が使用されるよう変更されたことの驚きについて書かれた回答が多く見られた。以上から、本実践の目的は既成概念から成る個人の感覚の差異に気づき、新しい価値観や考えを習得するという、全体における考え方の変容を調査することであったため、その目的や意図をより確実なものにすることができた。

最後に、近年の教育において重要視される内発的動機づけと、本実践で示した情意的領域は関連させることができる。なぜなら、教科書の内容に加え教師が背景知識を知り、生徒が様々な視点から物事を捉えることができる足場がけを行うことが可能であり、生徒も新しい価値観や考えの変容、派生する興味・関心を生み出せるからだ。まさに、異文化理解教育は、異文化に対する生徒の考えや、相手の立場に立って考えるコミュニケーション能力を育む要素となるのではないだろうか。

参考文献

- 阿野幸一・アレン玉井光江ほか. *New Horizon English Course3*. 東京書籍株式会社, 2025.
- 卯城祐司・中嶋洋一・西垣知佳子・深澤清治ほか. *Sunshine English Course2*. 開隆堂出版株式会社, 2021.
- 笠島準一ほか. *New Horizon English Course3*. 東京書籍株式会社, 2021.
- 工藤洋路ほか. *New Crown English Series3*. 三省堂印刷株式会社, 2025.
- 佐々木涼子. 『バレエの宇宙』. 文藝春秋, 2001.
- 佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健. 『異文化間教育のフロンティア』. 明石書店, 2016.
- 鈴木晶. 『バレエダンス事典』. 平凡社, 2010.
- _____. 『バレエとダンスの歴史欧米劇場舞踊史』. 平凡社, 2012.
- 高平鳴海. 『図解 踊り子』. 新紀元社, 2014.
- 西山教行・細川英雄・大木充. 『異文化間教育とは何かーグローバル人材育成のために』. くろしお出版, 2015.
- ミケーラ, デプリンス. 田中奈津子訳. 『Taking Flight 夢へ翔けて 戦争孤児から世界的バレリーナへ』. ポプラ社, 2015.
- 文部科学省. 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編』. 開隆堂出版株式会社, 2018.
- Ahmad-Crosby, Mina. *Breaking the Corps Line*. Landa & Wildan Publishing, 2021.
- Tyrus, Judy & Novosel, Paul. *Dance Theatre of Harlem*. Chroma Diverse, 2021.